第４２回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会

人を想う心

会津若松ザベリオ学園中学校　１年　　大野　朋乃果

小学校の頃、授業の中で、初めて人権について知りました。その授業は、いじめと人権について考えるというテーマだったため、授業後の私は、『人権とは、人がいじめられない権利のこと』であると理解していました。しかしその後、人権問題に関する報道や、日本国憲法で保障されている基本的人権についての授業などを通じて、その認識は、私の中で、ある疑問へと変わっていきました。

「当たり前に尊重されるべき人権が、なぜここまで社会問題になっているのだろうか。また、なぜなかなか解決されないのだろうか。」

中学生になった今、小学生の頃には、ただ知識としてしか理解していなかった人権問題について、改めて自分事として考えを巡らせてみました。その結果、最初に頭に浮かんだのは、幼少期に体験した、異国での生活の記憶でした。

私は、小学校に入学する前の二年間、親の仕事の都合で、中国で生活していました。幼かった私は、何事にも興味津々で、初めての言葉や文化をどんどん吸収し、異国の環境の中でも、毎日とても楽しく生活していました。しかし、そんな生活の中でも、ただ一つだけ、理解できなかった言葉がありました。

「小日本！（シャオリーベン）」

当時通っていた幼稚園の園内や、街中など、普段の生活の中で、この言葉を耳にすることがよくありました。この言葉を発する時、その人の表情は、こちらを挑発しているような印象だったため、直感的に、何か良くない意味なのではないかと感じていましたが、それ以上は気にも留めず、聞き流していました。

改めてこの言葉を調べてみると、『日本及び日本人に対する中国語の蔑称』であることが分かりました。また、この蔑称の背景には、日中戦争など、人権侵害の歴史と、恨みの感情が深く関係していることも知りました。

しかし、ここでまた疑問が浮かびます。

「昔の人達の感情が、なぜ今も受け継がれているのだろうか。」

調べた限りでは、『教育』がその原因となっているようでした。しかし、私は、本当の原因は他にもあるのではないかと思います。なぜなら、感情はあくまでも自分のものであって、簡単に他人から受け継ぐことができるものではないからです。

ここで私は、人権が、単なる権利ではないことに気が付きました。
人権が、ただ法律で決まっているだけの権利であれば、ルールを破った人が罰を受けることで、問題は解決するはずです。
ではなぜ、解決が難しいのか。それは、人権は、自分を守るための権利であると同時に、他人を尊重するための道徳であるからだと思います。道徳は、ルールで強制するものではありません。私たちが、気持ちよく過ごすために、相手を尊重する心こそが道徳です。だからこそ、その心を汚してしまうような行動は、なかなか治らない傷になって、深く人を傷つけてしまうのではないでしょうか。
今、世の中では、SNS での誹謗中傷、ジェンダー差別、民族・宗教差別など、沢山の人権問題が起きていますが、どの問題をみても、そこには、自分勝手に権利を主張する人がいます。権利は誰もが持つものですが、平等でなければなりません。他人の権利を侵害してまで、自分の権利を広げようとすることは、権利の問題以前に、道徳の心が欠けているのではないかと思います。
道徳の心は、他人を思いやることだけでなく、自分と他人の違いを認め、受け入れることでもあります。
私達は、見た目も、考え方も、環境も、みんなそれぞれ異なっています。同じ民族であっても、方族の中でさえ、意見が食い違い、ぶつかり合うこともあります。私達が心と感情を持って生きている以上、このような摩擦が起きてしまうことは、仕方ありません。その中で、人と人とのバランスを保ってくれるのが、人権なのだと思います。しかし、超えてはいけないルールをたくさん決めて、権利と権利の間に線を引くことだけでは、どこかの誰かががまんすることになってしまい、結局はまた、差別や争いが起きてしまいます。
ということは、人権問題を解決できるのもまた、人の心と言えるのではないでしょうか。
これから先もきっと、私は様々な形で、人権問題について、学び、考えることになると思います。その中で、自分にとって、『これこそが正しい意見ではないか。』と思えるような考え方や主張に出会うこともあるでしょう。そんな時にこそ、人権にとって最も大切なのは、他者を思いやり、理解しようとする人の心であることを思い出し、道徳的に発言し、行動できるような人間になりたいと思います。